

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 植原亮

本論文は、世界が認識可能であるのはなぜかという哲学的問いに対して、それは世界が自然種からなるからだという実在論的な答えをきわめて詳細かつ説得的に提示した秀逸な論文である。

まず、第Ⅰ部では、そもそも自然種とは何かを徹底的に追求され、歴史的概観および理論的な諸問題の検討から、自然種の一般理論が提示される。それによれば、自然種は基底メカニズムによって支えられ、偶然でない仕方で帰納的一般化が成立する恒常的性質群だとされる。この一般理論では、恒常的な諸性質の間の結びつきの強さに程度差が認められることにより、自然種の理論的統一性およびその実在性にも程度差が認められ、そのことによって非常に適用範囲の広い理論となっている。

続いて第Ⅱ部では、自然種の一般理論の応用問題として、その理論を生物種と人工物に適用することが試みられる。生物種は物質種と違ってメンバー間に多様性が見られる点で基底メカニズムに支えられた恒常的性質群として捉えるのが困難であるが、生物種は環境に適応するために本来的に多様化するという観点から、生物種の多様性がそれを自然種として捉えることを妨げないどころかむしろ促進することが説得的に論じられる。この論点は独自性があり、本論文の重要な成果である。また、人工物については、それが何であるかが製作者の意図によって決まるため、自然種として捉えることがきわめて困難であるように見えるが、これに対しては、製作者の意図そのものを自然種として捉えることが可能だとすることで鮮やかにその困難を克服している。

最後に第Ⅲ部では、自然種から成る世界を認識することで得られる知識もまた、世界を構成する実在的対象であり、自然種の1つであることが論じられる。知識を自然種として捉えるさいの困難は、生物種と同じく、その多様性であるが、ここでも知識がその存続のために本来、多様化するものであることがとくに人間の知識の具体的なあり方を詳細に検討することによってきわめて説得的に論じられている。

本論文は、自然種の一般理論の洗練、生物種に即しての多様性のある自然種の確立、自然種として捉えるのがきわめて困難と思われる人工物と知識の自然種としての把握、の3つの点において独自の貢献を行っており、また自然主義的な観点からのきわめて徹底した自然種論の非常にすぐれた試みであるという点において、きわめて高い評価に値する。よって、審査委員は全員、本論文をもって学位取得のために十分であると判断した。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。